
アメリカンヒーローズ と2人のシュタイナー

ユロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アメリカンヒーローズ と2人のシュタイナー

【Nコード】

N6451X

【作者名】

ユロ

【あらすじ】

懐かしのTV映画や小説のヒーローたちが集まり、悪い人たちをやつつける、勧善懲悪のーてんき小説

ブローグ

自宅のリビングでニュースを見ていたその男は、政府の下した決断に狂喜乱舞した。

「やったぞ！F-35Bの開発が中止になった！当然じゃないか、普通の飛行機は、ギューンと滑走して飛び立ち、グウォーンと着陸するもんだろ？あんな、ハチドリの出来損ないみたいに飛ぶ戦闘機が、栄光あるアメリカ軍に配備されてたまるか！おい、ベッキー、ビールを持って来い！今日はサントリー・モルツにしてくれ！」

妻のベッキーは、

「なんでアメリカのビールじゃないんですか？」

「今日、日本空軍がF-35Aを採用したからだ。それに日本のビールの味は、彼らの作る半導体のように、緻密でいい味出している。」

リビングで子供のようにしゃぐ白髪頭の男。彼の名前は、ロバート・ゲーツ前国防長官。F-35Bの開発に、強行に異を唱えた男だ。

彼は、キンキンに冷えたビールを口にしながら、

「だいたい、3機種を一度に開発しようと言う所に無理があるんだ。まあ、空軍向けのA型、海軍向けのC型位なら大丈夫だろう。マクマナラの時代より、エンジンアも賢くなっているからな。だが、STOVL（短距離離陸 垂直着陸機）のB型まで一緒に開発するのは、まずい。構造が違いすぎる！案の定、開発費の高騰を招いてしまった。これでB型の開発費をA/C型に回して、全体の開発費を抑えられるだろう。」

「その説明口調のせりふ、相変わらずだな。」

その男は、リビングの隅からフツと姿を現した。

「君はいつも同じ姿だな。白のスーツと、片方がサングラスのメガネ。そして杖。若いんだか歳なんだか、サッパリ分からね。」

ゲーツは、白いスーツの男に手を差し出しながら言った。

「アークエンジェル。ようこそ、現実の世界へ。」

「CIAの仕事で、架空の経歴・架空の名前、全てが架空の世界に生きていたからな。」

2人は、硬い握手を交わした。

「CIAを引退し、のんびり酒とポロを楽しむ生活をしていたと思ったら、君からの召集だ。どうせ、ろくでもないことを考えているんだろう?」

アークエンジェルの問いにゲーツは、

「実は私も、呼び出されたクチでね。相手は、大統領だ。」

「大統領?」

「そう。大統領の指示の下、君に与える特殊部隊が任務を遂行するのだ。」

「特殊部隊?」

「おまえが指揮する部隊と言ったら?」

「エアールフは、もうないが、それに匹敵する機体があるのか?」

「バカ言え! 超音速で飛べるヘリができれば、コリアートロフィー(米航空界における最高の賞)ものだ! だが、分野によっては、エアールフを超えている。」

「それは楽しみだ!」

「あと、制空権維持のために、固定翼機を付けてやろう。私が葬り去った、『最高の』機体を。」

ゲーツは、含み笑いをしてアークエンジェルを見た。

アークエンジェルは、また忙しい生活に戻るのかとため息をつき、ベッキーに声をかけた。

「奥さん! 『いいちこ』と梅干とお湯ください!」

プロローグ（後書き）

>登場人物<

・ロバートゲーツ

アメリカ前国防長官

・ベッキー・ゲーツ

ロバート・ゲーツの妻

・アークエンジェル

元CIA特殊部隊隊長

・マクナマラ

ケネディ/ジョンソン政権下の国防長官。海軍機と空軍機の共用でコスト削減を試みたが、見事に失敗。

第1話

アラバマ州フォートラッকারの陸軍航空博物館に所蔵のステルス偵察攻撃ヘリコプタRAH-66コマンチと、スミソニアン博物館に移送中だったF-35Bの試作機が姿を消した！

本来なら新聞で大きく取り扱われるような大事件だったが、一流紙のトップを埋め尽くしていたのは、ヨーロッパの経済不安、それとオバマ大統領の白人疑惑だった（肌の白いオバマ大統領の幼少期の写真の発見と、高校時代に通っていた日焼けサロンの店員の証言が発端となった）。

一方、タブロイド紙の記事は相変わらずで、「エルビスとJB、マイケル・ジャクソンのゾンビが、墓場でダンス対決」だの、「パリス・ヒルトン、UFOにさらわれて人格改造受？ コンビニの募金箱にブラックカードを寄付！」と、書きたい放題だった。

そんなタブロイド紙を、黒いスーツを着た男が数紙購入し、車に戻った。

車内でペラペラめくっていると、「金星人、日本の元ファーストレディの指示で、ステルスヘリ、ステルス戦闘機を強奪！」と言う記事に注目した。そして運転席の相棒に声をかけた。

「おい、J！この記事は怪しいな！」

「K、その記事見せてくれ。ああ、確かに怪しい。ただ金星人じゃなくて、彗星系の奴らじゃないか？ やつら、派手に伸びる尻尾を隠したがつっていたから、ステルス技術が有効だと考えたんだ。」

「本部のZに照会してみよう。」

Kは、Zに秘匿装置付き携帯（まだスマホ版は支給されていない）で確認を取ると、ため息をつきながら携帯を切り、Jに話し始めた。

「今回の件は、地球人の仕業だ。NSAやCIA、DIAにも属さない謎の組織の仕業で、仕事は我々とかち合わないそうだ。」

「それじゃあ、一安心だ。K、朝飯でも食べに行こう。」

そついうと、車は静かに動き出した。トヨタ プリウス M I B バ
ー ジ ョ ン は、リッター100kmの超低燃費で、行きつけのダンキ
ン ドーナッツへ向かった。

第1話（後書き）

>登場人物<

- ・J：MIBの年配の方。白人。
- ・K：MIBの若い方。黒人。
- ・Z：MIBのボス。メタボ気味。

第2話

私は今、湖畔まで延びるウッドデッキの上でシタールを弾いている。

これまでチェロの演奏を趣味としていたが、先日ボストン・ポツプス・オーケストラのチェリスト採用試験に不合格になり、自棄になった私は、愛用のチェロを楽器屋に売り、差額を足してシタールを買ったのである。シタールを選んだのは、COCO一番屋ボストン支店でカツカレーの3辛を食べていた時、BGMにラビ・シャンカールの曲がかかっていたからだろう。

最近不景気で、私には仕事がない。友人の経営するサンティーニ航空も廃業したためだ。ともに戦ったケイトリンは、結婚しながらも警察官の仕事を続けている。やはり公務員は、強いな！

でも私は、これまでの生き方に後悔していない。
最高の友を持ち、最高のへりを駆り悪と戦い、そして兄を奪還した。

強いて後悔したといえば、COCO一番屋の3辛が予想以上にかかったことくらいだろうか？

「シタール入門 これであなただもジョージの師匠！」というテキストを読みながら、のんびりシタールをマスターしていく日々。軍人恩給で普通の生活は維持できるし、今の生活に不満はない。

しかし、シタールでは埋められない心のパーツは何なんだろう？
そう考えた直後、私は腹部に何かが刺さる感覚を覚えた。銃声が遠くから聞こえ、私は痛みの源に視線を向けようとした時には、意識を喪失していた。

第2話（後書き）

> 人物説明<

・ラビ・シャンカール：インドのシタール演奏の第一人者。Beattlesのジョージ・ハリスンのシタールの師匠。

・ケイトリン：元テキサス・ハイウェイパトロールの女性警察官でエアポリス隊員。エアールフ3人目の要員。

第3話

私は、アメリカ空軍ネリス基地のBXでクワス（ロシアの清涼飲料水）を飲んでた。演習の合間に飲むクワスは、最高だ。もっとも、一般的アメリカ人の口にクワスは合わないで、私と僚機パイロットのパヴェル・チェコフくらいしか飲んでいないが・・・

私の任務は、レッドフラッグ演習でロシア空軍パイロット役で敵役をすることだ。

私が相手をするのはヒヨッコパイロットだが、彼らの操縦する機体は驚異の戦闘機であり、私は一瞬たりとも気を抜けない。

F-23 マスタング2。

この新鋭機は、私がかつてソ連から奪取したMiG31ファイアーフォックス（ソ連は、ファイアーフォックスが奪われ、技術資料も失われたことから、急遽MiG25の改造型をMiG31と名づけ、始めからファイアーフォックスなどないかのように装っていた）の技術を応用して設計された新鋭機だ。ファイアーフォックスの持つ高速飛行能力（Mach5）、ステルス性、考えるだけで機体を制御できる「思考誘導装置」などをアメリカ流にリファインし、さらに多くの新規技術を盛り込んだ恐るべき戦闘機で、この戦闘機の出現が、F-22の調達数を激減させる要因となった（なお、このF-23はノースロップ社製YF-23とは無関係で、開発は、ロッキード・マーチンのスキャンクワークスである）。

F-23相手に我が乗機Su-35で戦いを挑むのは、ゼロファイターでF-15と戦うようなものだ。

それでも私がほとんど落とされないのは、戦闘機のスペックの差を越える何かを持っているからだろう。

「ガント！クワス持ってきたぞ！」

「ありがとう、チェコフ」

私は、冷えたクワスを一口口にした。するとブラックアウトを起

こしたように視界が暗転し、平衡感覚を失っていった。
「チエコフ、これは一体……」
それがネリス基地で放った最後の言葉となった。

第3話（後書き）

> 人物紹介<

・パヴェル・チェコフ：アメリカ空軍アグレッサー部隊のパイロット。名前は、スタートレックの搭乗員より拝借。

第4話

第二次世界大戦、東部戦線。

一人のドイツ国防軍軍曹が、上官の大尉にMP40サブマシンガンを渡し、こう言った。

「ついて来い！鉄十字章の取り方を見せてやる！」

軍曹は、愛銃のPPSh-41を片手に、遮蔽物を渡り歩くように前進していった。大尉も一生懸命ついていくが、やがて辺りを濃霧が覆い、それが晴れた時には、軍曹の姿は見えなくなっていた。

「もう鉄十字章は、いらん！南仏辺りの部隊に転属してのんびり過ごそう！」

きびすを返し、西に向かって歩き始めた大尉は、胸に熱せられた火箸が刺さる感覚を覚えた。

地面に倒れ、意識が薄れる中、鉄十字章にこだわった自分を、こだわせたプロイセン貴族の血を呪った。

500m先の瓦礫の影で、ソビエト赤軍狙撃兵ヴァシリ・ザイツェフは、音を立てぬようゆっくりと排きよう・装填を行い、再びドイツ士官は居ないかと索敵を始めた。さっき撃ったのは、雑魚だ。もっと有能な士官を狙わなくては……

第二次世界大戦、イギリス南部。

ドイツ空軍降下猟兵中佐は、手漕ぎボートに置かれた手紙を読んで、ムツとした。

「わが親愛なるドイツ空軍中佐殿。私が脱出ポイントに着いた時、手配していた漁船と手漕ぎボートがありました。小柄な私がアイルランドまで帰るのに、中佐殿は、まさか手漕ぎボートを使うことを、私に強いたりしませんよね？」

「まったく、デブリンめ！」

中佐には、選択肢がなかった。手漕ぎボートで、ドーバー海峡を

渡る！

中佐は、手漕ぎボートをこぎながら、潮の流れによる偏流を計算し、南に向かった。

しばらくすると、中佐はミルクのような濃霧に包まれた。

霧が晴れると、そこには灰色の冷たい海が横たわっているだけだった。

第4話（後書き）

> 人物紹介<

・ヴァシリ・ザイツェフ：ソ連を代表する狙撃手。映画「スターリングラード」を見るより、小説「鼠たちの戦争」を読むことをお勧めします！

・リーアム・デブリン：IRAのテロリスト。今回は、ドイツがたくらんだチャーチル首相誘拐事件に加担した。

第5話

ストリング・フェロー・ホークが目を覚ましたところは、空調の効いた会議室だった。

辺りを見回すと、すぐ近くに昔の仲間が、テーブルに突っ伏していびきをかいて寝ていた。

「おい、ドミニク！君はドミニクじゃないのか？」

初老の小太りの男が目をごすりながら身を起こすと、

「そうだ。俺は、ドミニク・サンティーニ。ヘリのことにかけては・・・って、おい！お前、ホークじゃないか！」

「いやゝ懐かしいな、ドミニク。それにしても俺たち二人が拉致されたのは・・・」

「あの白いスーツのイカレ野郎が、俺達に何かやらせようということだろう。」

「しかし、エアールフはないぞ！」

そう、彼らが操るエアールフは、破壊されたのだ。それもチンタラ エアールフの警備をしていた兵士が、タバコの吸殻を、エアールフの数少ない弱点の空中給油口に入れて爆破してしまうという前代未聞の不祥事が原因だった（警備兵のスレッジ・ハマー等兵曰く、『あゝ死ぬかと思った！』）。

とその時だった。会議室の扉が開き、白いスーツの男とその美しい秘書、そしてがっしりした体躯の男が入ってきた。

「やあ君達、お目覚めのようだね。コーヒーを用意したが、いかがかな？」

「アークエンジェル！お前のことだから、変な物でも入れかねない！そうだろ？ホーク！」

「ドミニク、このコーヒー旨いぞ！」

ドミニクは、気が抜けながらも、矛先を変えて質問した。

「アークエンジェル！その横に居る、いかにもファイター（戦士）

という感じの男は誰だ？・・・あつ、このコーヒー旨いなあ。」

「そのコーヒーは、No.2が経営しているスターバックスのコーヒーだからな。彼の営業手腕は、優れたものだ。」

「隣に居るその男は、アメリカ空軍伝説のパイロット、ミッチェル・ガントじゃないか？」

ホークが質問すると、その男は、

「伝説とはいい過ぎだ。ただのアグレッサーパイロットだよ。」

「ところで、クレイグ・トーマスが著した『ファイアーフォックス』は、どれくらい正確に書かれているんだい？」

「彼は、私とのインタビューから、あそこまで壮大なスケールの話を作るとは思わなかったよ。作家は、偉大なほら吹きだ。実際の任務は、あの小説より1/10地味で、100倍危険なものさ。」

「おいホーク！俺にも彼を紹介してくれ！」

「ドミニクすまなかった。彼は、ミッチェル・ガント。米空軍きつてのファイター（戦闘機）パイロットさ。特殊任務もこなしている。」

「

「おい、アークエンジェル！特殊任務に従事した3人がココに集められたということは、なにかおっぱじめる気だな？」

「メンバーは、あと二人追加される。君達とは違う能力を持った、優秀な兵士だ。」

すると、白髪に白衣のいかにも「マッドサイエンティスト」という風体の男が、ドアを乱暴に開けて入ってきた。

「エメット博士。もう少し静かに入ってくれないか。」

アークエンジェルが、ドアで強打した頭をさすりながら言うと、
「来たぞ！世界最強の兵士と世界一優秀な特殊部隊隊長が！さて、ドイツ高官に変身だ！」

第5話（後書き）

< 人物紹介 >

・ ストリング・フェロー・ホーク：超音速攻撃ヘリ「エアールフ」のパイロット。

・ ドミニク・サンティーニ：サンティーニ航空の社長で、ホークの友人。「エアールフ」の搭乗員。

・ スレッジ・ハマー：刑事コメディ番組「俺はハマーだ」の主人公。どうやら、これでくびになり、刑事になったようだ。

・ No.2：ドクター・イーブルの片腕。イーブルが宇宙に逃亡している間に、いくつ物企業を起こし、大成功させる。スタバもそのひとつ。

・ エメット博士：町の中の発明家で変わり者。タイムマシンの開発に成功。詳しくは、映画「バック・トゥー・ザ・フューヤー」参照のこと。

第6話

霧が徐々に晴れると、見えてきたのは、高いフェンスとその向こうの砂漠、足元はコンクリート。広大な駐機場のように見える。右手には、地下鉱山への入口の様な建物があるが、ずいぶん立派だ。

軍曹は、愛銃のPPSh-41を構えながら、ゆっくりと前進していった。

すると前方から、硬い木がコンクリートをたたくコンツという音を聞いた。軍曹はその場で伏せ、PPSh-41を音のした方向に向けた。すると続いて、小声でドイツ語の悪態が聞こえた。軍曹は目を凝らし、彼がドイツ兵であることを確信した。

「カメラーデン！（戦友よ！）」

軍曹が声をかけると、

「カメラーデン！（戦友よ！）」

向こうからも返してきた。そして、ピストルらしき物を片手にこちらに小走りしてやって来た。

軍曹も立ち上がり、PPSh-41のセイフティをかけて相手の元に駆け寄った。どうやら相手は、私より階級が上のようなだ。

軍曹は敬礼をしながら、

「私は、国防軍軍曹 シュタイナーであります。東部戦線で従軍していましたが、霧を抜けるとココにたどり着きました。」

「私は、空軍降下猟兵中佐 クルト・シュタイナーである。西部戦線で特殊任務を遂行し撤収中、と言ってもあのカタター（手漕ぎ船）で移動中、霧に囲まれ、霧が晴れたらこの有様だ。」

「不思議な霧ですね。」

「ゲッペルスのいたずらか？とりあえず、周囲を警戒しながらあの建物に行ってみよう。」

しかしその試みは、ナチスドイツの軍服を着た男が運転するキューベルヴァーゲン（ドイツの小型軍用車両）の送迎で、楽なものに

なった。運転しているのは、なんとゼツプ・デートリヒだ！

キューベルヴァーゲンは、建物中央の開いたシャッターを通り、大型エレベーターで停車。ずいぶん長いこと地下まで降りて大型エレベーターが止まった後、キューベルヴァーゲンをそこに停めて会議室へと向かった。

ドアを開け中に入る二人のシュタイナー。

「これで役者はそろったようだな！ようこそエリア51、へ！」

二人のシュタイナーがきよんとする中、ホーク、ドミニク、ガントの3人は驚きを隠せなかった。

「エリア51だって？」

第7話

「エリア51だって！」

ホークとドミニクが驚きの声を上げると、ゼップ・デートリツヒの変装を取ったエメット博士がていせいした。

「エリア51じゃないぞ！エリア51、！51の右上にダッシュが付いているだろ？あつ、今の数学ではプライムと言う方が一般的かな？」

二人のシユタイナーが、ポカンとする中、説明は続いた。

「かのアイゼンハワー大統領の時代のことじゃ。ロズウェル事件がきっかけとなって、アメリカは宇宙人や宇宙人の持つ高い技術を得て、ソ連に対する優位を築こうとしたんじゃ。そのための研究施設が、エリア51じゃ。」

「それは分かるけど、なんでエリア51があるんだ？」

ドミニクが質問すると、エメット博士は、

「あの頃のアメリカは、リッチだったから、何でも2つ以上のメーカーに発注して、優れた方を採用することにしてたんじゃ。戦闘機も、戦車も、国防省内の自動販売機だってそうじゃった。そしてその最大のものが、エリア51とエリア51、ことエリア52じゃ。」

出番が少なくなると悟ったのか、モフェット博士が話を続けた。

「エリア52は、優れた能力を持っていた。地下3000mに設けた加圧水型原子炉により、150年間外部からの給電を必要とせず、また、あらゆる核兵器の直撃にも耐えうる構造・地下深度に居住・研究スペースが設けられている。まさに完璧だった。1点を除いて、

「1点を除いて？」

「そうだよ、ホーク君。壁の色が薄い水色だろ？アイゼンハワーは、陸軍の軍人だったから、壁の色は薄いカキ色が好きなんだ！しかも、薄い水色は、海軍を連想させるとして、エリア52に1歩入

るなり不採用として、粗末なエリア51を採用したんだ。」

「なんともはや、陸軍と海軍は、そんなに仲が悪いのかね？」

「ドミニク君、昔の日本軍に比べれば、マシさ。で、困ったのは、会計監査。いくら、2社以上に作らせるのが一般的だからって、秘密基地を2つも作ったとなれば、議会が黙っていない！そこで、わら半紙に書類を作らせ、エリア52をエリア51・と改名したんだ。すると、わら半紙は異物が多いから、エリア51もエリア51・に見え、もしくは、”・”がごみと間違われ、エリア51と誤読され、何がなんだか分からなくなるというわけさ。もちろん会計監査は、パスしたよ！ただし、『次回から、もう少し良質な紙を使うように』と言われた。」

「ペテンだな！」

後ろに居たシュタイナー中佐が、ボソツと言った。

「そうだよ、シュタイナー君！ペテンさ！ドイツ人や日本人は正直すぎるから、戦争に負けるんだ！」

いかにも政治家といった声が答えた。

第8話

「ゲーツさん、メンバーは集まりましたよ!」

アークエンジェルが言葉をかけると、

「あ、ドイツの英雄たち。そちらの椅子に掛けたまえ。私は、前アメリカ国防長官のゲーツだ。」

すると銃のセーフティが切り替えられる音が2つ、簡素な部屋に響いた。

「おいおい、もう戦争は終わったのだ。アメリカが勝ち、ドイツと日本が負けた。その後、技術・経済戦争で、ドイツと日本が勝ち、アメリカはヨレヨレだ。」

「今は西暦何年だ?」

「シユタイナー中佐。今年は、2011年だ。」

「じゃあ、21世紀なのか?」

「そうだ。人間は、月に人を送り、ガンを撲滅しつつあり、地上を音速を超えて走る車を作り、原子1個レベルでの加工も可能にした!」

「あゝ質問していいかな?」

シユタイナー曹長が、ゲーツに声をかけた。

「小銃弾は、火薬の燃焼圧力で飛ぶのか?」

「そうだ。」

「自動車の燃料は、ガソリンか?」

「そうだ。」

「戦争は、世界のどこかで続いているのか?」

「続いている。我が国も1枚かんでいる。」

「離婚する夫婦は?」

「沢山居るよ。」

「中佐。21世紀は、我々がSF小説で読んで未来ほど進んでないようですね!」

シュタイナー中佐はニヤリと笑い、ゲーツは苦笑いした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6451x/>

アメリカンヒーローズ と2人のシュタイナー

2011年11月26日07時45分発行